

ニュージーランドを訪れて

嘉戸 昭夫*

『地球上で最も平和で美しいといわれる南十字星の国を、最も美しい季節を訪れてみませんか』との名文に心を動かされて、林統研ニュージーランド合同セミナーに参加した。英語が話せず、参加者の中には知人もいないなど出発前は多少不安もあったが、同行の先生方のおかげでたいへん良い経験をさせていただいた。耳からの情報は少なかったけれど、その分を大きな瞳で少しはカバーしてきたつもりである。そこで、ニュージーランドの印象の一端を述べてみたい。

ニュージーランドというと、広い牧場とたくさんの羊を連想される人も多いことでしょう。事実、日本の7割の面積に、7,000万頭の羊と800万頭の牛がいるとのことである。私達はオークランド国際空港で飛行機を降り、ここから林業試験場のあるロトルアまではバスの旅となった。オークランドの郊外に出るとまもなく緑のじゅうたんを敷きつめたような牧草地が見えはじめ、そこではのんびりと羊や牛が草をはんでいた。傾斜が比較的ゆるやかとはいえ、牧草地が平野や丘陵地はもちろん山頂にいたるまで広がっており、森林は谷沿いや河川付近などにわずかに散在しているだけであった。このような光景がロトルアまでの約200km えんえんと続いていた。

ところで、日本でこれに似た大規模な牧草地がみられるのは、北海道の道東、道北地方ではないだろうか。これらの地方は北海道の中でも気温が低いため、稲、麦、豆類の栽培に適さない。そのために単位面積当りの生産性は低いが広大な土地を生かして酪農をしているとかつて教わったことがある。しかし、バスの窓からはナンヨウスギや木性シダ、柑橘類などが見られ、気候は北海道に比べてかなり温暖なのがわかった。ではこの国ではなぜ牧草地しかないのだろうか、なぜもっと生産性の高い作物を栽培しないのだろうか、多少稲作にたずさわっている私にとって不思議であった。

この疑問に対する答が全て明らかになったわけではないが、日本に帰ってから読んだ本には次のように書かれてあった。ニュージーランドにおける牧畜のはじまりは1843年で、当時の貿易先は、宗主国であるイギリスしか考えられなかったが、イギリスへは船で6か月もかかるうえに、赤道をこえる暑い旅であった。そのために輸出できたのは変質の心配のない羊毛に限られたというのである。おそらく同様の理由で麦や雑穀は自国で消費される程度しか栽培されなかったのであろう。その後、冷凍輸送船が建造されると、生産性の低い羊毛生産にかかわって羊や牛の肉類が外貨のかせぎ頭となり、将来は酪農製品がこれに取ってかわるかもしれないとのことである。このように、牧畜の形態が時代とともに変化しているだけでなく、牧畜業が貿易収支に占める割

*富山県林業技術センター林業試験場

合も第二次世界大戦後しだいに低下しつづけており、現在は約50%を占めるにとどまっていると
のことである。近年、牧畜業にかわって貿易収支が増加しているのは木材などの林業部門、野菜
や果実などの農業部門およびアルミニウム製品などの鉱業部門とのこと。車窓から見えた牧草地
も徐々に森林や野菜や果実などの農園にかわっていくのであろうか。

そのニュージーランド林業の急成長を支えているのが、カリフォルニア原産のラジアータパイ
ンである。この国の人工林は国土の約4%であるが、その90%にこのマツが植えられている。木
材の総蓄積量はソ連やアメリカ、カナダなどに遠くおよばないが、ラジアータパインを企業ベ
ースにのせたことで一躍世界の注目を集めている。これらのことについてはすでに信州大学の木平
先生をはじめ多くの方々が紹介されているので御存知の方も多いことであろう。私達もこの国を
代表するといわれているロトルア近郊のカインガロアの林業公社有林を見学する機会を得た。15
万haヘクタールにもおよぶ広大な平地林にまず驚かされた。植林は1920~1930年代からおこな
われているとのことで、その当時に植えられたという林の伐採現場に案内していただいた。直径
60cm、樹高30数mもある大木が枝葉を落した状態のままログローダで土場まで運ばれてきて、
それをただちに採材し、大型トレーラーに乗せるという手ぎわの良さである。ここの一人当りの
伐出量は平均で33m³/1日にもなるとのことであった。一箇所の伐採面積は数10haでかつての
北海道のような大面積皆伐が行われていた。多くの伐採跡地は地拵のために火が入られている
ようであった。この頃に植えられたものをOld cropというのに対して、1960~1970年代のそれは
New cropとよばれている。Old cropは施肥が粗放であったので節が多いなどあまり材質が良く
ないが、その後この国の林業者が総力をあげて改良したのがNew cropである。これは、成長が
すこぶるよく、30年生で40m、ha当りの材積成長量(利用材積)も20~30m³/年にも達し、枝打
ちや間伐技術が確立されたことによって材質も飛躍的に向上し、さらに虫害に対する抵抗性も高
くなったとのことであった。また植栽、3回の枝打ち、2回の間伐、収穫に必要な総人数は場所
にもよるが平地では7人/haとの説明があった。この人数は京都大学の赤井先生によれば日本の
15分の1以下とのことで、参加者一同は大変に驚いた。さらに現在問題になっているのは風害と
霜害ぐらいとのこと。以上のように種々の条件に恵まれていたとはいえ、ラジアータパインの美
林を作り、さらにはそれを一大企業に育てあげたことがなによりもまして素晴らしいと思った。
このように収益性の高い林業経営を確立できたがゆえにニュージーランドでは林業に対する期待
も大きいのであろう。一方、我が国ではより生産性の高い産業に転換するという名目で森林が伐
採されている。確かに経済性からみるとそれもしかたがない面もあるが、森林の他の機能を考慮
すれば割り切れないものを感じた。

ところで、南島のクライストチャーチに近い山岳部は北島ロトルアとは異なり森林がきわめて
少なく、ところどころに崩壊地があり、河川も濁っているのが飛行機からよくわかった。この地
域の森林の取扱について木材生産のみならず治山治水や自然保護を含めた観点からの話を聞けな
かったのが少し残念であった。また、ニュージーランドについてもっと詳しく知ろうとするなら

ば、大きな目だけでは不十分で、耳と口も鍛えなければならないことを痛感した。